

価値づけ方略の再検討

赤間 健一*・高木 悠哉**・森岡 陽介***

Reconsideration of the strategy of finding the value of behavior

Kenichi AKAMA, Yuya TAKAKI and Yosuke MORIOKA

概要

本研究では、動機づけ調整方略において価値づけ方略と呼ばれてきた方略における価値がどのような価値を表しているのかを検討し、さらにどのような価値が動機づけ調整に有効であるのかを検討することを目的とした。その結果、従来価値づけ方略として扱われてきた方略は、何か特定の価値を見出すのではなく、活動を自身に関連付ける方略である可能性が示唆された。また、課題価値づけを行う5つの方略、特に興味価値づけと制度的利用価値づけが自律的な動機づけを高めることに寄与しており、さらに、5つの方略の使用頻度から、全方略の使用頻度は等しくその程度が異なる3タイプと利用価値づけのみを行う計4タイプが抽出された。各タイプ間の動機づけを比較した結果、課題価値づけを行うほど動機づけが高くなるが、その中でも利用価値づけを行う事が自律的な動機づけを高めるために有効である可能性が示唆された。

キーワード：価値づけ方略，課題価値づけ，自律的動機づけ

日々の生活の中で、やりたいことばかりができるわけではない。時にはやりたくなくてもやらなくてはならないことがある。そのようなときに、自分自身を動機づけ、行動を行う必要が生じる。自分自身を動機づけることができるかどうかは動機づけ調整の問題である。

動機づけ調整とは、特定の活動や、目標を達成するという意思を始発、維持、あるいは補うために行う行為(Wolters, 2003)である。特に、動機づけ調整方略を使用することで動機づけ調整が行われる。これまでに、興味のある所を見出す興味促進方略や行動の価値を見出す価値づけ方略などが望ましい方略として示されてきた(例えば、赤間, 2015; 伊藤・神藤, 2003; 梅本・田中, 2012)。赤間(2015)は動機づけ調整方略を、行動を開始するために自身を動機づける動機づけ始発方略と、行動を持続させるための動機づけ維持方略に分けて考える必要性を指摘し、動機づけ始発方略には興味促進方略が見いだされなかったことを報告している。

やらなくてはならないことをする時、これは動機づけの始発の問題である。赤間(2015)は、動機づけ始発方略の中でも、価値づけ方略と、それをやらなかった時に生じる悪い結果を想起し、それを回避しようとする罰早期方略の二つが動機づけに直接的に影響していることを示した。中でも、価値づけ方略については、自己決定理論において自律性を高める際の価値の内在化とも通ず

るところがあり(Deci & Ryan, 2002)、自律的な動機づけを高めると考えられる。しかしながら、価値づけ方略は、行動の価値や自身にとってのメリットを見出すことで自身を動機づける方略であるが、やりたくないと感じている時点で、行動を引き起こすほどには価値やメリットは高くはないことが想像できる。

赤間・高木(2016)は、価値づけ方略が有効と言われるものの、必ずしも誰もが使用できるわけではないことから、メタ動機づけ的知識の一部として、価値を見いだす方法についての知識の有無について探索的に検討した。その結果、やるべき時にやるべきことができるかどうかに関わらず、価値を見いだすことや、した場合、しなかった場合の後への影響を考えることが有効であるというメタ動機づけ的知識は持っているものの、それを具体的に使用する方法についての知識については持っていない可能性が示唆された。

価値づけ方略について考える際、価値そのものについても考える必要があるのかもしれない。行動の価値を考えるとき、その内容は多岐にわたることが示されている。伊田(2001)は、課題価値の測定尺度を作成するにあたり、課題価値を学習することの楽しさや満足感を表す興味価値、ある内容を学習することが、他者から見て望ましいと認知している公的獲得価値、自分から見て望ましいと考えている自己像の獲得につながると考えている私

* 福岡女学院大学

** 奈良学園大学

*** 聖カタリナ大学

的獲得価値、就職や進学試験での合格のために必要と考えている制度的利用価値、職業的な実践において有用性があると認知されている実践的利用価値の5つに分類した。何に価値を置くかは異なるものの、いずれも課題に付随する価値であり、価値づけ方略を用いる際の価値として想定されている可能性がある。

課題価値に関するこれまでの研究において、いずれの価値も学習行動と望ましい関連が示されている（例えば、興味価値（伊田，2003a；鈴木・櫻井，2009），（実践的）利用価値（伊田，2003a，2003b；鈴木・櫻井，2009），獲得価値（松元・千葉・改元，2017））。特に、伊田（2003a，2003b）は、自律的な学習動機づけ像の中核をなすものであり、社会志向性との関連からは学習内容を職業実践に活かすことにつながるものであるため実践的利用価値の重要性を指摘している。

しかしながら、これまでに作成された動機づけ調整に関する尺度の中で、価値づけ方略、またはそれに類する方略の中で、どの種類の価値を想定しているかについては明示されていない。動機づけることができるのであれば、価値の種類は問わないのかもしれないが、尺度の項目が特定の価値のみを反映している場合、それ以外の価値を想定することで動機づけている場合は、実際は価値づけ方略を使用しているにもかかわらず、使用していないようにとらえられてしまう可能性がある。

これまでに作成された尺度の価値づけ方略とそれに類すると考えられる尺度の項目について、例えば、伊藤・神藤（2003）では、価値づけ方略に相当する方略は見られないが、想像方略の中に、「将来に自分自身のためになると考える」という項目がある。これは利用価値を高めるものと考えられる。梅本・田中（2012）では、価値づけ方略に含まれる「勉強の内容が将来の役に立つと考える」や、成績重視方略に含まれる「単位を取るためだと考える」が利用価値を、興味高揚方略に含まれる「興味のあることと関連させる」が興味価値を高めるものと考えられる。赤間（2015）では、「自分のためだと考える」「目標のためだと考える」「する理由を考える」という項目があるが、自分のためや目標のためという表現は、利用価値を高めるようにも考えられるが、獲得価値を高めるとも考えられるため、どの価値を想定しているかは明確ではない。このように、価値づけるための方法と考えられる方略は抽出されているものの、どの価値を測定しているかは統一されていない。そのため、動機づけ調整における価値づけが意味する内容が不明確であると言わざるを得ない。価値づけることが出来れば価値の内容は問わないのかもしれないが、課題価値と動機づけの関係を考慮すると、どの価値を意識しているかによって動機づけへの影響が異なる可能性も考えられる。また、課題に取り組む前の動機づけ調整である動機づけの始発においては、課題の内容についての情報も、取り組み後に比べると少ないと考えられる。そのため、例えば、興味

価値を高めようにも、内容についての情報が少なく、興味価値を持ちようがない、等想定できる価値の内容も課題に取り組んでいる間に比べ限定される可能性もある。そこで本研究では、動機づけ始発時に価値づけ方略を使用した際に喚起される価値が課題価値のどの価値であるかを検討することで、動機づけ調整における価値づけ方略の特徴を明らかにする。また、課題価値のどの価値を見出すことが動機づけに影響するののかについても併せて検討する。

方法

調査参加者 大学生182名（男性34名，女性148名，平均年齢20.2（SD = 0.74）歳）が本研究に参加した。

調査内容 動機づけ始発方略：赤間（2015）の動機づけ始発方略尺度20項目を使用した。1. まったくしない，から，6. いつもしている，までの6件法であった。課題価値づけ：自分のため，目的のため，と考える際の具体的な内容を測定するために，伊田（2003a）の課題価値評価尺度を参考に作成した。1. 全く当てはまらない，から7. 非常に当てはまる，までの7件法であった。授業への動機づけ：赤間（2013）の尺度16項目を使用した1. 当てはまらない，から，5. 当てはまる，までの5件法であった。

手続き 授業終了後に配布し，各自のペースで回答を求め回収した。

倫理的配慮 回答は強制ではないこと，途中でやめることができること，匿名の調査であり，プライバシーは保護されること，後日問い合わせが可能であること等を書面及び口頭で説明し，書面による同意を得たうえで調査を行った。福岡女学院大学倫理審査委員会による審査を受け，承認された（審査番号17033）。

結果

価値づけ方略（課題価値づけ）の因子構造を確認する為に，確認的因子分析を行った。伊田（2003）と同じ因子構造を仮定し，最尤法による推定を行った。その結果，適合度が $\chi^2(339)=553.03, p<.001, CFI=.941, RMSEA=.059$ であり，因子負荷量の推定値も.5以上であり，因子構造の妥当性が確認された。各尺度の下位尺度の α 係数を算出したところ，全て.6以上であり，許容できる範囲の内的整合性が確認されたため，尺度得点を算出した。動機づけ始発方略，授業への動機づけ，課題価値づけの各下位尺度の平均値，標準偏差， α 係数をTable1に，課題価値づけ間の相関係数をTable2に示した。

課題価値づけの5方略間の相関については，二つの利用価値づけ間（ $r = .80$ ），二つの獲得価値づけ間（ $r = .65$ ），興味価値づけと私的獲得価値づけ間（ $r = .77$ ），私的獲得

Table1. 基礎統計量

	M	SD	α
内発的動機づけ	2.95	0.90	.89
高自律的外発的動機づけ	3.74	0.80	.81
低自律的外発的動機づけ	3.16	0.64	.72
価値づけ方略	3.79	0.95	.72
自己報酬方略	4.26	1.03	.78
罰想起方略	4.13	0.98	.73
社会的方略	3.33	1.05	.71
欲求解消方略	3.97	0.83	.65
興味価値	4.48	1.14	.88
制度的利用価値づけ	5.04	1.25	.91
実践的利用価値づけ	4.72	1.17	.87
私的獲得価値づけ	4.21	1.19	.88
公的獲得価値づけ	3.63	1.29	.89

Table2. 課題価値づけ間の相関係数

	1	2	3	4	5
1 興味価値づけ	-				
2 制度的利用価値づけ	.33***	-			
3 実践的利用価値づけ	.42***	.80***	-		
4 私的獲得価値づけ	.77***	.36***	.60***	-	
5 公的獲得価値づけ	.47***	.17*	.41***	.65***	-

価値づけと実践的利用価値づけ間 ($r = .60$) において比較的強い正の相関がみられた。

価値づけ方略における価値の内容を検討するために、価値づけ方略と課題価値づけの相関係数及び各課題価値づけにおいて他の課題価値づけをパーシャルアウトした偏相関係数を算出し Table3 に示した。価値づけ方略と課題価値づけの間の相関係数は、.3 から .44 までと有意な相関がみられたが、偏相関係数は、興味価値づけのみが有意であったが、.18 とはほぼ関連はなかった。

Table3. 価値づけ方略と課題価値づけの相関係数及び偏相関係数

	価値づけ方略	
	r	pr
興味価値づけ	.43***	.18*
制度的利用価値づけ	.35***	0.03
実践的利用価値づけ	.44***	0.14
私的獲得価値づけ	.43***	0.03
公的獲得価値づけ	.30***	0.03

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

動機づけ始発方略と課題価値づけの動機づけへの影響を検討するために、動機づけを基準変数とし、価値づけ方略と課題価値づけに関連がなかったため、異なる動機づけ始発方略と考えられるため、動機づけ始発方

略と課題価値づけ全てを説明変数とした重回帰分析を行った。ステップワイズ法を用いた。結果を Figure1 に示した。内発的動機づけに対しては、回帰式が有意であり ($R^2 = .31, p < .001$)、価値づけ方略 ($\beta = .19, p < .01$) と興味価値づけ ($\beta = .46, p < .001$) が正の影響を示した。高自律的外発的動機づけに対しては、回帰式が有意であり ($R^2 = .37, p < .001$)、価値づけ方略 ($\beta = .22, p < .01$) と興味価値づけ ($\beta = .25, p < .001$)、制度的利用価値づけ ($\beta = .33, p < .001$) が正の影響を示した。低自律的外発的動機づけに対しては、回帰式が有意であり ($R^2 = .25, p < .001$)、罰想起方略 ($\beta = .22, p < .01$) と実践的利用価値づけ ($\beta = .26, p < .001$)、公的獲得価値づけ ($\beta = .21, p < .01$) が正の影響を示した。

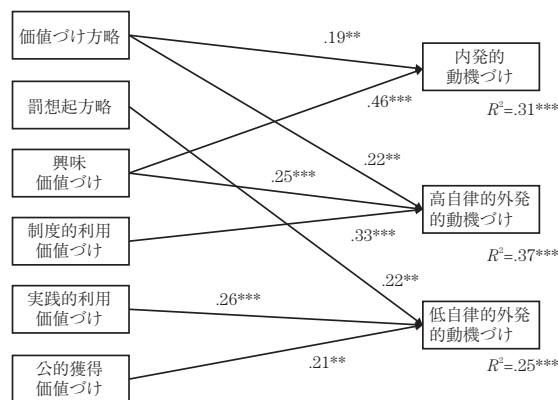


Figure1. ステップワイズ法による重回帰分析結果

注) ** $p < .01$, *** $p < .001$

課題価値づけの仕方に個人差があるかどうかを検討するため、5つの課題価値づけについて Ward 法によるクラスター分析を行った。デンドログラムを参考に4クラスター解を採用した。各クラスターの特徴を Figure 2 に示した。クラスター2は二つの利用価値づけが高く、他の価値づけが低いという特徴があり、その他の3クラスターは、5つの課題価値づけの程度はクラスター内では同程度であり、クラスター3、クラスター1、クラスター4の順にその程度が低くなっていた。そこで、クラスター1は中価値づけ群 ($n = 66$)、クラスター2は利用価値づけ群 ($n = 29$)、クラスター3は高価値づけ群 ($n = 45$)、クラスター4は低価値づけ群 ($n = 22$) と命名した。また各クラスターの動機づけの平均値及び標準偏差を Table3 に示した。

クラスター間で動機づけが異なるかどうかを検討するためにクラスター (高価値づけ群, 中価値づけ群, 低価値づけ群, 利用価値づけ群) × 動機づけ (内発的動機づけ, 高自律的外発的動機づけ, 低自律的外発的動機づけ) の二要因分散分析を行った。その結果、交互作用が有意傾向であり ($F(6, 356) = 2.09, .05 < p < .10$)、下位検定を行った。

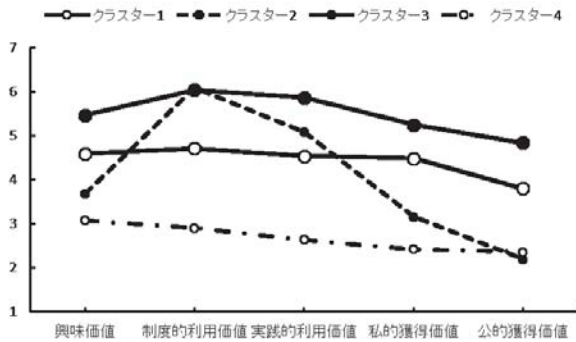


Figure2. 課題価値づけによるクラスターの特徴

Table4. クラスター別の動機づけの平均値と標準偏差

	内発的動機づけ		高自律的外発的動機づけ		低自律的外発的動機づけ	
	M	SD	M	SD	M	SD
高価値づけ群	3.30	0.69	4.21	0.53	3.57	0.51
中価値づけ群	3.02	0.85	3.70	0.70	3.10	0.58
低価値づけ群	2.16	1.14	2.82	1.01	2.65	0.79
利用価値づけ群	2.78	0.76	3.80	0.62	3.09	0.54

クラスターにおける動機づけの単純主効果の検定を行った結果、全クラスターにおいて動機づけの効果が有意であった（順に、 $F(2, 356) = 39.00, p < .001$, $F(2, 356) = 25.99, p < .001$, $F(2, 356) = 31.63, p < .001$, $F(2, 356) = 8.37, p < .001$ ）。多重比較を行った結果、高価値づけ群、中価値づけ群、利用価値づけ群では、高自律的外発的動機づけが内発的動機づけ、低自律的外発的動機づけよりも高く、内発的動機づけと低自律的外発的動機づけの間には有意差は見られなかった。低価値づけ群では、高自律的外発的動機づけと低自律的外発的動機づけの間には有意差がなく、内発的動機づけがこれら二つの外発的動機づけよりも有意に低かった。

次に、動機づけにおけるクラスターの単純主効果の検定を行った結果、内発的動機づけ、高自律的外発的動機づけ、低自律的外発的動機づけのいずれにおいても単純主効果が有意であった（順に、 $F(3, 178) = 9.68, p < .001$, $F(3, 178) = 19.51, p < .001$, $F(3, 178) = 13.27, p < .001$ ）。多重比較を行った結果、内発的動機づけにおいては、利用価値づけ群はいずれの群とも有意差がなく、中価値づけ群が低価値づけ群のみより高く、高価値づけ群も低価値づけ群のみより高かった。高自律的外発的動機づけにおいては、高価値づけ群、中価値づけ群、低価値づけ群の順に高く、利用価値づけ群は低価値づけ群より高く、他の2群とは有意差がなかった。低自律的外発的動機づけは、高価値づけ群が他の3群全てより高く、低価値づけ群は、他の3群全てより低かった。中価値づけ群と利用価値づけ群には有意差はなかった。

考察

本研究では、価値づけ方略における価値が、価値のどのような側面を表しているのかどうかを検討することを目的とした。動機づけを始発する際の価値づけ方略の内容として、課題価値の5つの価値、興味価値、実践的利用価値、制度的利用価値、私的獲得価値、公的獲得価値のいずれが関係あるのかを検討した結果、価値づけ方略は課題価値づけのいずれの価値とも関係がなかった。そのため、赤間（2015）が価値づけ方略と命名した方略は、伊田（2003）があげた5つの課題価値とは異なる価値を反映している、または価値づけ方略と呼ぶこと自体が適切ではない可能性が考えられる。Schwinger, Steinmayr, & Spinath（2009）は、動機づけ調整方略の一つとして自己重要性の促進という方略を見出していた。自分のためと考える、目的のためと考える、という内容を含む赤間（2015）の価値づけ方略は、課題価値よりも Schwingerら（2009）の自己重要性の促進方略に近く、行動の意味を自己に関連づける方略、自己関連づけ方略と呼ぶ方が適切であると考えられる。

課題価値づけ、動機づけ始発方略の動機づけに対する影響を検討した結果、価値づけ方略と興味価値づけは内発的動機づけと高自律的外発的動機づけに、制度的利用価値づけは高自律的外発的動機づけに正の影響を示した。罰想起方略と、実践的利用価値づけ、公的獲得価値づけは低自律的外発的動機づけに正の影響を示した。価値づけ方略と罰想起方略については、赤間（2015）においても同様の関係がみられており、自分のためと考える事が自律性の高い、内発的動機づけや高自律的外発的動機づけを高め、ネガティブな結果を想起し回避しようという罰早期方略は、仕方がなくする、義務だからするといった低自律的な外発的動機づけに影響することは理解できる結果である。資格取得や就職のためといった制度的利用価値づけが高自律的外発的動機づけに、実践的利用価値づけは低自律的外発的動機づけに正の影響を示していたが、伊田（2003b）においては、実践的利用価値の方が自律性指標との関連が強く、本研究の結果とは異なり、制度的利用価値は自律性指標との関連は弱かった。ただし、制度的利用価値は希望就職先の採用制度によって規定されるもので、将来の職業実践における有用性に注意を払いながら学習に取り組むことが結果として試験対策にもなる可能性もあると述べており、本研究における制度的利用価値づけと高自律的外発的動機づけの関係は授業が資格取得や就職につながると捉えられていたと解釈できるだろう。これに対し、将来の職業における実践的有用性を見出す実践的利用価値づけが低自律的外発的動機づけにのみ影響していたことは、授業は将来の職業とは結びついておらず、将来、働くということ自体が自律的に捉えられておらず、したくはないがしなくてはならないものと認識されている可能性も考えられる。こ

の点については、キャリア発達の視点も含めて、今後さらなる検討が必要であるだろう。

自己報酬方略、社会的方略、欲求解消方略、私的獲得価値づけは動機づけに影響していなかった。自己報酬方略、社会的方略、欲求解消方略については、赤間（2015）においても、動機づけとの関連はみられず先行研究と同様の結果であった。私的獲得価値づけについては、理想とする自己像に近づくための価値を見出す方略と考えられるが、本研究においては、授業への動機づけに関連がなかったことから、理想とする自己像に近づくということ考えても、授業への動機づけには影響しないということであり、授業は理想の自己像に近づくための役に立つとは考えられていないのかもしれない。

興味価値づけは、内発的動機づけと高自律的外発的動機づけといった自律性の高い動機づけに正の影響を示していたが、赤間（2015）においては、動機づけの始発においては興味を見出すといった方略は抽出されず、活動に取り組む前の段階では興味を見出すことが難しい可能性が示唆されていた。本研究では、自分のため、目的のためと考える際に想起する価値について回答を求めたており、選択肢として提示したため回答は得られたが、実際に動機づけの始発の際にも興味価値づけを行うかどうかについては今後の検討が必要である。

課題価値づけにおける個人差について検討するため、クラスター分析を行った結果、4つのタイプに分類された。4つのうち、3タイプは、全体的に価値づけを行う程度が高いタイプ、中程度のタイプ、低いタイプであり、残りの一つは実践的、制度的の両利用価値づけが高く、残りの3つの価値づけが低いタイプであった。これらタイプ間の動機づけの違いを検討したところ、低価値づけ群においては、内発的動機づけが両外発的動機づけより低く、外発的動機づけ間には差は見られなかった。残りの3群においては、高自律的外発的動機づけが高く、内発的動機づけと低自律的外発的動機づけに差は見られなかった。また、タイプ間の差については、高価値づけ群は、全ての動機づけが高く、次いで中価値づけ群、そして低価値づけ群は自律的な動機づけが他の群よりも低かった。利用価値づけ群は、両外発的動機づけが低価値づけ群よりも高く、内発的動機づけ、高自律的外発的動機づけは高・中価値づけ群とは差がなかった。このことは、基本的には、全ての課題価値づけを用いる頻度が高いほど、動機づけが高くなると考えられるが、特に利用価値づけを用いることが高自律的外発的動機づけを高めることに寄与している可能性が示唆された。このことは、伊田（2003b）が、実践的利用価値や制度的利用価値が自律的な動機づけ像の中核をなすと指摘したことを支持する結果と考えられる。

本研究の結果、従来価値づけ方略として扱われてきた方略は、課題価値づけ方略とは異なる方略であり、自己関連づけ方略として捉えなおす必要がある可能性を示

した。また、課題価値づけ方略も授業への動機づけに影響していたが、自律的な動機づけに対しては、興味価値や制度的利用価値を高めることが有効であることを示した。ただし、これは授業の性質によっても変わる可能性があるだろう。授業の内容が将来に役立つと認識されたならば実践的利用価値づけが動機づけを高める可能性もあるだろう。これは授業事態に付随する問題であり、本研究の目的とは異なるが今後検討が必要である。また、課題価値づけ方略の使用においても、使用するほど動機づけが高まる可能性が示された。特に中でも利用価値づけが高自律的動機づけを高める際に有効である可能性が示唆された。

解良・中谷（2014）や解良・中谷・梅本・中西・柳沢（2016）は、利用価値を持たせるよう介入することで、実際に利用価値や他の課題価値が高まることを示し、自律的に動機づけるために、利用価値を高める介入、利用価値を見出すための考え方を指導することが有効である可能性を示している。就職や資格の取得に役立つだけでなく、その後の就職してからの生活においても役立つという利用価値を強調し、学生に自身にとっての利用価値を見出させることで授業に対する自律的な動機づけを高めることが可能となるのではないだろうか。

引用文献

- 赤間健一（2013）. やる気喪失状況尺度作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集, **55**, 150.
- 赤間健一（2015）. 動機づけ始発方略尺度の作成 心理学研究, **86**, 445-455.
- 赤間健一・高木悠哉（2016）. 行動の価値を見出す力の探索的検討—メタ動機づけ知識の観点から— 福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要：発達教育学, **3**, 35-39.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.) (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester, NY: University of Rochester Press.
- 伊田勝憲（2001）. 課題価値評定尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 **48**, 83-95
- 伊田勝憲（2003a）. 教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討—自我同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から— 教育心理学研究, **54**, 367-377.
- 伊田勝憲（2003b）. 心理学系科目における向社会的な学習動機づけ像を探る—自意識および個人志向性・社会志向性と課題価値の関連— 心理発達科学論集, **33**, 37-48.
- 伊藤崇達・神藤貴昭（2003）. 中学生用自己動機づけ始発方略尺度の作成. 心理学研究, **74**, 209-217.
- 解良優基・中谷素之（2014）. 認知された課題価値の教授と生徒の課題価値評定、および学習行動との関連 日本教育工学会論文誌, **38**, 61-71.
- 解良優基・中谷素之・梅本貴豊・中西満悠・柳沢香那子（2016）. 利用価値介入が大学生の課題価値の認知に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, **40**, 57-60. 松元理恵子・千葉しのぶ・改元香（2017）. 郷土料理に接する経験が女

子短大生の思考や行動に与える影響—自尊感情とキャリア形成に視点を当てて— 鹿児島女子短期大学紀要, 52, 135-140.

Schwinger, M., Steinmayr, R., & Spinath, B. (2009). How do motivational regulation strategies affect achievement: Mediated by effort management and moderated by intelligence. *Learning and Individual Differences*, **19**, 621-627.

鈴木高志・櫻井茂男 (2009). 利用価値の性質と学習動機づけに与える影響 筑波大学心理学研究, 37, 87-97.

梅本貴豊・田中健史朗. (2012). 大学生における動機づけ調整方略. *パーソナリティ研究*, **21**, 138-151.

Wolters, C. A.(2003). Regulation of motivation: Evaluating an underemphasized aspect of self-regulated learning. *Educational Psychologist*, **38**, 189-205.